演題番号: P4-3

筆頭名:山本真弓

筆頭所属名: 昭和大学 呼吸器アレルギー内科

共著者名:

〇山本真弓1） 田中明彦1） 山口宗大1） 大田進1） 本間哲也1）渡部良雄1） 橋本直方1） 横江琢也1） 松倉聡1） 足立満2）

共著者所属:

1）昭和大学 2）呼吸器・アレルギー疾患研究所

演題名: 喘息患者における IgE の経時的変化と重症化に関する検討

【背景】IgE がアレルギー性疾患において中枢的な役割を果たすことは周知の事実であり、血清 IgE 値と喘息の有病率には相関があることが証明されている。一方、IgE と喘息重症化に関しては、SARP（Severe Asthma Research Program）や ENFUMOSA（European Network For. Understanding Mechanisms Of Severe Asthma）などの大規模臨床試験によって相関がないことが明らかとなった。今回、我々は IgE 値の経時的変化の喘息重症化に与える影響について検討を行った。【方法】対象患者は 10 年前と現在の IgE 値から一年あたりの IgE の変化値（ΔIgE）が算出できる喘息患者 154 名。対象患者をΔIgE によって 1）低下群、2）軽度低下群、3）軽度上昇群、4）上昇群の 4 群に分け、4 群を現在の治療スッテプ、症状のみの重症度、経口ステロイドの頓用使用頻度、抗原特異的 IgE 抗体などについて比較検討した。【結果】4 群の患者背景では、調査時の平均年齢に有意差を認め、低下群が他の 3 群よりも若かった。治療ステップ、（臨床症状による）重症度、経口ステロイド薬（OCS）の頓用使用頻度に関してはいずれも 4 群間に有意差を認めた。上昇群は高い治療ステップにて管理されている患者が多く、臨床症状も重症が多く、OCS の頓用使用頻度が高かった。また、%FEV1 は上昇群において有意に低下していた。以上より、経年的 IgE の上昇は喘息の重症化および難治化に関与していることが示唆された。4 群それぞれにおける吸入抗原特異的 IgE 抗体の陽性率に関しては、カンジダ、アスペルギルス、アルテルナリアなどの真菌に対する陽性率が上昇群において他の群と比較し高率であった。一方、イヌやネコなど動物の上皮およびガやゴキブリなど昆虫に対する陽性率が低下群において高率であった。【結語】今回我々の調査により、IgE 特に真菌に対する特異的 IgE の関与した高齢者重症喘息のフェノタイプが存在する可能性が示された。